現代文化の学際研究の現在

廣瀬浩司（比較・現代文化分野担当）

キーワードは、芸術・身体・フランス思想

わたしの専門はフランスの現代の思想や身体論・芸術論などです。授業では主に「比較・現代文化分野」を担当しています。

現代文化というと、みなさんはすぐ「グローバリゼーション」とか「マルチ・メディア」とか、紋切り型の言葉が浮かんできてしまうかもしれません。

しかし、こうした言葉は、みなさんが生きている現実をほんとうに捉えているのでしょうか。とくにみなさんがくじけたり、からだがこころに反逆してきたりしたときに、こうした言葉が何の訳にたつでしょうか。

私の授業では、からだやこころが傷ついてうまく機能しなかったときに、いったいどうやって乗り越えていくのか、そういった場面から出発して、思考を立ち上げていくことを目指しています。そしてそうした発想こそが、たとえば差別を受けて傷ついた人が生きて行くにはどうしたよいのか、あるいは反対に、これまでだれも見たことのないような風景を描いた画家の身体の中で何が起きているのか、そうしたことを考えるためのヒントを与えてくれているとかんがえています。

これまでの授業の具体的な柱は以下のとおりです。

（1）イメージ論

映画、写真、絵画など、現代にはさまざまなイメージがあります。そうしたイメージを、できるだけ創造的な場面から出発して考えることを目指します。たとえば、かけがえのない人を失ったとき、その人の写真は、その人ともう一度出会い直させてくれるでしょうか。あるいは、収容所体験のような、言葉を絶するような経験をして、沈黙してしまった人に、いったい何を語ってもらえばよいのでしょうか。そうした人が持っているイメージを、そうやって映像化していけばよいのでしょうか。授業ではこうしたことを考えました。

また心にうかぶイメージや、夢のイメージは、芸術的なイメージとどう関係しているのでしょうか。

（2）現代の権力と生の思想

みなさんが考えること、感じることは、いったいどの程度まで自由で、どの程度まで文化によってすり込まれているのでしょうか。

ミシェル・フーコーという思想家は、こうした問題を「権力」の問題として考えています。そのため彼は、学校の教室の配置、病院の建築、動物園、そして監獄の建築の歴史が似かよっていることに気づき、そうした空間的な配置が、わたしたちの心と体をどのように操作しているかを研究しました。

授業では、こうしたフーコーの権力にたいする考え方から出発して、現代の最先端の理論までを徹底的に論じてみました。キーワードはずばり「生命」です。

このような研究は、わたしのフランス思想の研究に基づいています。じつは現代の文化研究を理解するためには、戦後のフランス思想の知識は欠かせません。みなさんの知っているかぎりでは、ジェンダー論やフェミニズムでは、ボーヴォワール（私の研究対象のメルロ＝ポンティはボーヴォワールの友人でした）から始まり、フレンチ・フェミニズムという流れをかたちづくっています。西洋と東洋（オリエント）の関係について考えたサイッドはフーコーから出発しています。またデリダという思想家の本は、文学理論から現代政治理論まで、多大な影響を与えています。記号論を文化研究に生かしたのがロラン・バルト、メディアと身体の関係について考えたのがヴィリリオ･･･　と挙げればきりがないほど。

手前みそですが、できたら第二外国語ではフランス語を選択していただけると、授業がわかりやすくなると思います。

指導卒業論文

これまで指導した卒業論文は何十もあると思いますが、そのおもな主題（題名そのものではありません）は、おおむね以下のとおりです。筑波大学のみならず、東京大学や京都大学の大学院まで進学して、勉強を続けてくれている人が多いのはうれしいかぎりです。

- エイズと文化
- 障害者と身体
- 現代絵画と現代音楽
- ファッション写真研究
- 臓器移植を文化的に考える
- 映画における触覚
- 報道写真論
- 「声」とは
- まなざしとは何か？
- マグリット研究
- ゴヤ研究
- メルロ＝ポンティ研究
- デリダ研究
- フーコー研究
- ドゥルーズ映画論研究
- 長崎広島の沈黙の声
- 精神医学と文化

＋＋＋＋

これまでの授業や論文についてはホームページ（http://www.asahi-net.or.jp/~dq3k-hrs/index.html あるいは「廣瀬浩司」で検索）を見て下さい。

・また共著『知の教科書　デリダ』（講談社選書メチエ）の巻末の「知の練習問題」に挑戦してみてください。

他の著書（とくに教科書的なもの）

- 東洋大学哲学講座２『哲学を使いこなす』（知泉書館、共著）
- 『現象学と二十一世紀の知』（ナカニシヤ書房、共著）
- 『デリダ』（白水社、近刊）